

『神の言葉に追われて』 ヨナ1:1-

1:1 主の言葉がアミッタイの子ヨナに臨んで言った、

1:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである」。

1:3 しかしヨナは主の前を離れてタルシシへのがれようと、立ってヨッパに下って行った。ところがちょうど、タルシシへ行く船があったので、船賃を払い、主の前を離れて、人々と共にタルシシへ行こうと船に乗った。

1:4 時に、主は大風を海の上に起されたので、船が破れるほどの激しい暴風が海の上にあった。

1:5 それで水夫たちは恐れて、めいめい自分の神を呼び求め、また船を軽くするため、その中の積み荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船の奥に下り、伏して熟睡していた。

1:6 そこで船長は来て、彼に言った、「あなたはどのように眠っているのか。起きて、あなたの神に呼ばわりなさい。神があるいは、われわれを顧みて、助けてくださるだろう」。

●序論

わたしたちは「ヨナの物語」という時、おそらく預言者としてではなく、大きな魚に飲まれた人のエピソードとして覚えている方の方が多いのではないのでしょうか。

とても簡単にこの物語としてのあらすじを述べると、

①神が、ヨナを預言者ニネベという異邦人の大都市に遣わすことを命じたが、ヨナは神に背を向けて反対方向に船出した。神は嵐をもってその船を阻み、その嵐の中ヨナは水夫たちによって海に投げ入れられた。そこで大きな魚がヨナを飲み込み、

②三日三晩を経て悔い改めたヨナはその魚から吐き出され、

③ニネベに遣わされます。そこでこの町の滅びを予告するが、その町の民は王を初めとしてみな、その言葉を聞いて悔い改めて悪行をやめ、神はその姿に心を留めて、滅ぼすことを思いとどまります。

④しかし、その結果に腹を立てたヨナは神に文句を言う、

…ざっとそんなストーリーです。

この物語は、このヨナを通してどんな風に歴史が動き、イスラエルの民に影響を与えたか…ということを物語るものではありません。ただ神さまが、一人の反抗的な預言者をどのように正し、その御心を示されたかが描かれています。

そのありさまは、たぶん私たちと神さまとのやり取りにも心当たりのあるものではないか、そんな風思いめぐらしつつ耳を傾けていければ感謝です。

●本論

I. 神の言葉が臨むとき

1:1 主の言葉がアミッタイの子ヨナに臨んで言った、

1:2 「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって呼ばわれ。彼らの悪がわたしの前に上ってきたからである」。

主なる神の言葉が人に、そしてわたしたちに臨むということは重要なことです。

神さまの理由と目的のもと、わたしたちは聴き従うという応答が求められています。

聖書には、数々の信仰者や預言者たちが、神の言葉に応答して出て行き、そしてその言葉を行いました。

さて、ここでヨナは、なぜか意図的に、神の言葉に逆らっていることが分かります。

ここでヨナは、神の言葉がそのような敵国に告げられるとき、そこで彼らが祝福を受けることに抵抗覚えたのです。

そして気づくのです。ああ、あのヨナは神の言葉を携えた宣教師としてニネベに遣わされたのだと。しかもそのニネベは敵国の首都、そして悪の町であると言われている。そこに神の言葉をもたらすという使命。だから抵抗感を覚えた。

彼のことを、イスラエルの民を愛する「愛国者」と表現する人がいます。

そんな彼にとって、もし自分が出向くことで、憎むべき敵国に祝福をもたらすことになるかもしれない…、それは承服できないことでした。それで彼は反対方向に出て行きます。

:3 しかしヨナは主の前を離れて〔しかしヨナは、主の御顔を避けて（新改訳）、しかしヨナは主から逃れようとして（新共同訳）〕

わかってはいはいます。「神さまの言葉と、その御心に聞き従う」ことこそ大切であり、祝福だと。

でもそんな彼がヨッパに行くと、ああタイミングよくタルシシ行きの船がある、これは、どうも神さまの御心がこちらにもあるんじゃない…などと思えるような状況…そうおもって船に乗り込んでいったのかもしれない。

わたしにも心当たりがあるのですが、神の言葉がはっきり示されているにもかかわらず、それに逆らって歩むと、都合よく自分の判断をフォローしてくれるような状況が整っている。あれ？こっちもありじゃないのか、いや神さまはこっちを良しとしてくださいだったのかも…などと、自分自身を納得させてしまうことがある。

しかし、わたしたちは決して忘れてはならないこと。神の言葉が自分に臨んでいるという経験こそが、わたしたちの最も大切な指針となるということです。

わたしたちはクリスチャンですから、全面的に神さまに逆らおうとは思ってはいません。でも、もしかしたら全面的に神さまの御言葉に頼ろうともしないのではないのでしょうか。

「神さまのみこころ」ではなく、いつの間にか「自分のおこころ」を優先にしてしまうことはないのでしょうか。

もし、そのことに気づくとき、このヨナの経験を思い起こしていただきたいのです。

Ⅱ. 神は選んだ人を追いかける

1:7 やがて人々は互に言った、「この災がわれわれに臨んだのは、だれのせいかわかるために、さあ、くじを引いてみよう」。そして彼らが、くじを引いたところ、くじはヨナに当たった。

1:8 そこで人々はヨナに言った、「この災がだれのせいで、われわれに臨んだのか、われわれに告げなさい。あなたの職業は何か。あなたはどこから来たのか。あなたの国はどこか。あなたはどこの民か」。

1:9 ヨナは彼らに言った、「わたしはヘブルびとです。わたしは海と陸とをお造りになった天の神、主を恐れる者です」。

1:10 そこで人々ははなはだしく恐れて、彼に言った、「あなたはなんたる事をしてくれたのか」。人々は彼がさきに彼らに告げた事によって、彼が主の前を離れて、のがれようとしていた事を知っていたからである。

1:11 人々は彼に言った、「われわれのために海が静まるには、あなたをどうしたらよからうか」。それは海がますます荒れてきたからである。

1:12 ヨナは彼らに言った、「わたしを取って海に投げ入れなさい。そうしたら海は、あなたがたのために静まるでしょう。わたしにはよくわかっています。この激しい暴風があなたがたに臨んだのは、わたしのせいです」。

1:13 しかし人々は船を陸にこぎもどそうとつとめたが、成功しなかった。それは海が彼らに逆らって、いよいよ荒れたからである。

1:14 そこで人々は主に呼ばわって言った、「主よ、どうぞ、この人の生命のために、われわれを滅ぼさないでください。また罪なき血を、われわれに帰しないでください。主よ、これはみ心に従って、なされた事だからです」。

1:15 そして彼らはヨナを取って海に投げ入れた。すると海の荒れるのがやんだ。

1:16 そこで人々は大いに主を恐れ、犠牲を主にささげて、誓願を立てた。

さてわたしは不思議に思いました。なぜ神さまはここまでヨナにこだわるのか。

ヨナが不従順なら、他に人を立てればいい。すなおな人を選べばいい…という風に。

いやいや元々、なんでこんな頑固で反抗的なヨナを選んだのか…と。

そのことを思いめぐらしていた時、気づかされたのです。

ああ、わたしもこのヨナと同じだ。神が、なぜわたしを救い、なぜ選んでくださったのかわからない。そして私はこのヨナ以上に頑固で、神さまの言葉に不従順な態度をとることが多いけれども、それでもなお、神さまはわたしをあきらめないで、御手を伸べ続けていてくださっている。…そのことを想わされたのです。

このすべてが恵み、神の大きな恵みであり、この恵みをもって神さまはわたしたちを追うてくださっているのです。詩篇139篇に同様の体験があらわされています。

139:7 わたしはどこへ行って、あなたのみたまを離れましょうか。わたしはどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。

139:8 わたしが天にのぼっても、あなたはそこにおられます。わたしが陰府に床を設けても、あなたはそこにおられます。

139:9 わたしがあげぼのの翼をかって海のはてに住んでも、

139:10 あなたのみ手はその所でわたしを導き、あなたの右のみ手はわたしをささえられます。

さてヨナははっきりと自分こそがこの嵐の原因だとわかり、伝えました。自分をこの海に投げ入れれば、この嵐はおさまると。

水夫たちは、それを聞いてわかりました。でも彼らはヨナを海に投げ込むのをためらい、何とか自分たちで船を陸に戻そうとしますが、ますます嵐はひどくなる、とうとう彼らは勘弁して主の前に呼ばわってからヨナを投げ込みます。

彼らは、そのときそのヨナを投げ込むことで自分たちを責めないでくださいと訴えた祈りの言葉もここにある通りです。

そうして投げ込んだ瞬間、嵐がとどめられたことを水夫たちは経験したのです。

彼らは、そこでまことの主なる神を畏れ、信じる者とされていきました。

Ⅲ. 神の前に降参する

1:17 主は大なる魚を備えて、ヨナをのませられた。ヨナは三日三夜その魚の腹の中にいた。

大きな魚は、神によってそこに備えていました。

彼を、大海でおぼれさせて死なせるのではなく、その魚の腹において生かし、そこでヨナは、神さまと一対一で向き合って、神さまを呼び求めて、その交わりによって彼は回復されていったのです。

彼は、そこで神さまの大きな憐れみの中で降参して祈っています。

2:1 ヨナは魚の腹の中からその神、主に祈って、

2:2 言った、「わたしは悩みのうちから主に呼ばわると、主はわたしに答えられた。わたしが陰府の腹の中から叫ぶと、あなたはわたしの声を聞かれた。

そのところこそが、神さまと自分だけ、神さまの恵みを再確認し受け取ることのできる祈りの場、神さまへ自分が降参したものであることを表すにふさわしい場所でした。

「陰府（よみ）の腹の中」と呼ぶその場所。それはイエス・キリストが十字架で死に、墓に葬られ、陰府にくだられた…というその事実を思い起こさせる状況です。

それは共通点を持ちながらも対照的です。

ヨナは、その頑固さゆえにここに至り、イエス・キリストは、はじめから徹底した神への従順さゆえに、人々の罪の呪いのすべてを受けて死んで、このよみに至っているのです。

そしてイエスさまはご自身のことを「…しかし、身よ、ヨナにまさる者がここにいる」（マタイ12:41）と宣言するほどでした。

だから、はっきり申し上げます。神の前に降参できる人は幸いです。

わたしたちの生きる時代の現実、このヨナが握りしめ、こだわり続けていたような愛国心ゆえ、…頑固さがある。敵意は敵意を、憎しみは憎しみを増幅させています。そんな現実をよくよくご存じで、神さまはそんなわたしたちに、ご自身の言葉を臨ませてくださいます。わたしたちの心をやわらげ、神の思いと愛と赦しと慈しみの中に置くためです。それがここで、頑固なヨナが経験した、大きな魚の腹の中での経験でした。

この腹の中で祈った最後の言葉が、本当に神さまにむけられた素直な言葉です。

2:9 しかしわたしは感謝の声をもって、あなたに犠牲をささげ、わたしの誓いはたす。救は主にある」。

「救は主にある」。これこそわたしたちが手放せないでいる、さまざまな現実的敵意や憎しみ、悩みの中での、神さまご自身から受け取ることのできる賛美の言葉です。